

聖家族 ルカ 2：22～40 シメオンの賛歌

「初めて生まれた男の子は神様のもの」というしきたりに基づいて、両親は生まれて40日目に男の子を神殿に捧げます。といっても、神殿に行って子羊1匹と山鳩一羽（余裕のない人たちは鳩二羽）を捧げて、神様から自分の子を買戻してきます。本気で、神様にわが子をお捧げすることもできないので連れて帰ります。本音と建前の違いがあります。

ヨセフとマリアも、習慣にのっとって神殿に行きます。けれども、思いもかけず、シメオン、アンナという老人が現れます。2人は、建前ではなく、実際に神様に自分を捧げて生きていました。イエス様が成人して、すべての人に仕えることを予告し、神様を賛美します。特にシメオンは、イエス様の奉獻が本物になるほど、苦しいものになると生々しく予告します。とはいえ「儀式」を終えると、聖家族はナザレに帰っていきます。

今日は、シメオンの賛歌と呼ばれる祈りについて考えます。シメオンは、信仰の人でした。長い間、自分の民の栄光を熱望してきました。イスラエルの民が蔑まれ、圧迫され、苦しんでも希望しました。「イザヤが約束した国々を照らす光を見たい」と待ち望みました。

シメオンの賛歌は「今、この瞬間（そのとき）」ということばから始まっています。神がご自身をあらわす瞬間を表現しています。「今、そのとき」神は私たちにご自身をあらわします。一人の幼子を抱く一人の老人の姿は、命・使命のリレーをする2つの世代の場面です。老人は幼子を抱いて、自分の未来を抱きます。自分の生命を引き継ぐ方を抱いて満足します。シメオンは「今そのとき」を長い間、希望しながら待ちました。シメオンが幼子を抱いたことは「今そのとき」私たちが、神様の新しさと対面することを象徴しています。神様の新しさは、一人の幼子の姿で現れます。

ところが、現実には、古い人が幼子を簡単には受け付けません。ヘロデ王がその典型です。幼子を殺すためにベトレヘム周辺の2歳以下の男の子を皆殺しにしました。「自分のポストを奪ってしまうのではないか？」恐れや、恨み、心配をかかえて、幼子を見てしまうのはヘロデ王だけではありません。古いものと新しいものが調和できないことがあります。

シメオンは、他人なら見過ごす幼子の意味を発見して駆け寄りました。シメオンはこう祈ったでしょう。「主よ、十分です。私が熱望したことは全て、今、ここにあります。私の心はいっぱいです。全て、私の望みは満たされました。」

イエス様の誕生が、シメオンにとっては人生の完成でした。幼子イエスは、永遠の世界の架け橋でした。

せつかく幼子イエスが生まれても「毎年のことです。この幼子には救いはありません。」と目を閉じることがないようにしましょう。神様の新しい計画を見つけましょう。それにはシメオンのように、期待して待つことが大切です。

今年は、新型コロナウイルスの影響を受けましたが、来年に向けて神様の新しさを見つけられるように願いましょう。